

【第 17 回アジア新体操選手権大会 1 日目】

開催日：2026 年 5 月 23 日（土）～26 日（火）

開催地：キルギス・ビシュケク

5 月 23 日～26 日、キルギス・ビシュケクにて第 17 回アジア新体操選手権大会が開催された。今大会には、個人シニア 17 か国、団体 10 か国が出場。日本からは、団体に日本女子体育大学、個人に鈴木菜巴選手と喜田未来乃選手が出場した。

本大会は、個人競技において 8 月にドイツで開催される世界選手権の出場枠を懸けた重要な大会である。予選 4 種目（フープ・ボール・クラブ・リボン）の計 8 演技の合計得点により出場枠が決定され、上位 4 か国には 2 枠、それ以外の国には 1 枠が与えられる。そのため、日本としては 4 位以内に入り、2 枠獲得を目指して大会に臨んだ。また、個人・団体ともに 10 月に日本で開催されるアジア競技大会への出場枠も懸かっており、個人はベスト 3 種目合計の順位により上位 10 か国に 2 枠、団体は総合予選において上位 14 位以内に入ることが条件となる。

【個人：喜田未来乃】

《フープ》得点：26.60（DB 8.10/DA 3.50/A 7.60/E 7.40）

序盤はやや慎重さも見られたが、持ち前のダイナミックさを生かし、身体難度や技を着実に実施した。最後のリスクでは、身体とフープのタイミングにずれが生じ、高く上がったことで 2 回前転となり、シリーズや受けの価値を十分に生かしきれなかったが、1 種目目を大きなミスなくまとめることができた。

課題の一つであるフェットターンでは、途中から脚の下がりが見られたほか、バランスの静止や DA の転がしの正確さに欠けた部分が見られた。1 種目目からより安定して実施できることが今後のポイントとなる。

《ボール》得点：24.30（DB 6.30/DA 3.40/A 7.55/E 7.05）

冒頭のエカルテバランス中に行う DA の小さな投げにおいて、手の届く範囲ではあったものの落下につながり、大きな失点となった。その後はすぐに立て直したが、リスクの受けではやや不安定さが見られ、実施減点につながった。ラファエリターンへの挑戦や、パンシェターンで 5 回転を回るなど、音楽を生かした身体難度を実施する場面も見られた。国際大会では予定通りにいかない場面の中で、いかに演技の流れを切らず、作品のフレームを崩さず最後までやり切れるかが重要となる。限られた 1 分 30 秒の中でも、攻めの姿勢を持って最後まで演技をつなげたことは一つの収穫であった。一方で、フェットターンや

バランス静止などフォームの崩れが見られた部分は、フープ同様に今後の課題である。

【個人：鈴木菜巴】

《フープ》得点：18.85 (DB 5.00/DA 3.00/A 6.35/E 5.10)

1種目目、直前のアップでは落ち着いて確認ができていたが、本番では余分な力みがかわり、冒頭のリスクにおいて本来なら対応できる場面で弾いてしまい、場外となった。その後は耐えながら演技をつなぎ続けたが、最後のリスクでも再び場外となり、動揺が見られる内容となった。

この冬、予期せぬ脚の故障に見舞われ、十分な練習積算量を確保できない中で、世界選手権予選という重圧のかかった今大会を迎えることとなった。限られた条件の中でリハビリと調整を重ね、今の自分に「やれることは何か」を常に問い続けながら、残された時間の中で実直に準備を重ねてきた。そのプロセスにおいて、一步も引かずにやり尽くそうとした選択に後悔はないだろう。ただ、シミュレーションやイメージだけでは届かなかったもの、それが「試合勘」であった。フロアに立った瞬間にしか得られない特有の感覚や、緊迫感の中での一瞬の判断力は、やはり本番の舞台でしか取り戻せないものであったことを痛感する演技となった。

《ボール》得点：24.45 (DB 6.70/DA 3.10/A7.40/E7.25)

フープでは大きなミスが続き、様々な感情もあったと思われるが、直後にボールを持った時には、切り替えた覚悟のようなものが見えた。ボール本番までは1時間もない中、それでも変わらず直前練習を行った。

本番では、冒頭の手以外・視野外を伴った高得点のリスクをしっかりと決め、引くことなく最後までやり切った。身体難度においてはノーカウントとなったものがあったと思われる、DBが伸び切らなかった部分はあったが、今シーズンの新たな演技で鈴木選手ならではの世界観を作り出し、どのような状況でも最後までやり切る力は、これまでの経験と彼女の努力の賜物である。

明日は予選順位が決定する重要な1日となる。緊張感の続く戦いが予想されるが、鈴木選手、喜田選手ともに持ち味と経験を生かし、最後まで自分らしい演技を発揮することに期待したい。

【団体：日本女子体育大学】

《ボール5》得点：23.35 (DB/DA/A6.80/E6.05)

出場選手：山岸聖菜、常住加留奈、中村林伽、東愛梨、森下璃子

日本からは、昨年の全日本選手権大会で優勝した日本女子体育大学が日本代表として出場した。アジア選手権初出場の選手も多く、緊張感が漂う中であつたが、「光る君へ」の音楽に乗せ、美しく演技を披露した。

交換や関係による移動はあつたものの、1種目目という緊張感のある中で、お互いにカバーし合いながら演技をつなぐことができていた。しかし、最後のCRにおいて背中で打ち返したボールが相手に届かず落下となり、悔しい形で演技を終えた。そこまでの流れや完成度が高かっただけに、非常に惜しいミスとなった。最後までやり切る強さと冷静さが今後の鍵となる。

明日は、個人競技の後半種目（クラブ・リボン）、団体のアンサンブル種目（フープ3・クラブ2）が行われ、個人・団体の予選総合順位と国別対抗順位が決定する。